

医療者調査実施における院内体制等の検討

研究分担者 前田 英武 高知大学 医学部附属病院・医療ソーシャルワーカー

研究要旨

研究要旨

本研究は、がん診療連携拠点病院等（拠点病院）に関するがん診療の実態を継続的に把握・評価できる適切な評価指標の開発・選定を通じて、「がん診療提供体制のあり方に関する検討会」にエビデンスを提出し、次期整備指針の策定や「がん対策推進基本計画（基本計画）」の推進に寄与することを目的としている。

本年度は、医療者調査のパイロット調査に自施設も参加し、その実施に際しての拠点病院側の課題や、負担軽減の視点での検討を行なった。また、ロジックモデルや医療者調査の項目に関して、がん相談支援、地域医療連携の観点から検討を行なった。

A. 研究目的

ロジックモデルを用いた拠点病院のがん診療の質向上に役立つ客観的な評価指標の策定を目指し、医療者調査のパイロット調査を行なった。自身の所属機関もパイロット調査に協力したが、その実施を行なう事務部門の取り組みについて組織内でモニタリングを行なった。また、医療者調査の設問設定や、ロジックモデル修正について、がん相談支援、地域医療連携の観点から検討を行なった。

B. 研究方法

本研究班が作成したロジックモデルによる評価のために必要と判断された医療者調査は、拠点病院で従事する医療者にとって、拠点病院の取り組みについて個人として調査されるという初めての経験となった。業務上の負担感や、個人の責を問われるのではないかと不安が聴取される可能性も視野に、自施設での調査の経過を観察するとともに、調査に関する時組織内の問い合わせ窓口となることで、調査を実施した事務職員や調査対象者からの声の収集を行なった。

（倫理面への配慮）

本研究における情報の分析・調査については、原則として匿名化したデータを扱うため、個人情報保護上は特に問題は発生しないと考える。

C. 研究結果

令和5年までに実施した全国の拠点病院、がん診療連携協議会へのインタビュー調査にて、がん患者のみを支援するがんセンター等では連携部門や相談支援部門が、がん拠点病院の活動にコミットし、調査等を行なった場合にもそれらの部門の活動や成果が現況報告等に反映しやすいが、総合病院において非がん患者にも関

わる連携部門、相談支援部門においては、現況報告について全く把握しておらず、関与できていないと話す機関も存在し、がん患者への支援の実態が網羅されていない可能性が示唆された。また、インタビュー調査では、がん拠点病院の事務局としての機能に、しかるべき役職の専任者を配置できている機関、多様な業務の一部としてなんとか取り組んでいる機関など、格差があることが示唆された。そうした知見を参考としつつ、自施設で実施された医療者調査の取り組みを検討した。自施設は大学病院としてがん患者、非がん患者の割合が概ね同程度の診療を行なっている医療機関である。そのため、本院ががんの拠点病院であることについて教職員に対し研修等にて周知はしているものの、拠点病院の役割や責務への理解が十分とはいえない状況と考えられる。そこで、医療者調査に際しては、全職員への協力周知の際に、改めて自組織ががん拠点病院であることの周知から開始することとなった。また、がんに関する報告等は毎年現況報告でも実施されているため、本調査を取り扱う事務部門はすみやかに決まったが、全職員に調査を行なうための事務決済や手順の決定には多少の混乱が生じた。調査開始以降は、全体周知の他に、回答率の悪い職種や部門長への個別の依頼などを数回重ねた結果、最終の回答率は15.3%であった。事後の聞き取りにおいて、本アンケートはがん患者に接することのある全ての医療職員を対象としていたが、実際にはがん患者に接することがあっても、その関わりの程度が低いと感じた職員は積極的な回答には至っていなかったことが分かった。また、研究班でも配慮が必要な事項として意識されている拠点病院側の「負担感」について、この調査が今後も継続される可能性に対しての懸念と言った声は聞こえてきてい

た。今後の医療者調査実施にあたっては、現況報告のように拠点病院の承認維持には必須の調査であると言った縛りに加えて、指定要件で求められている「自施設の診療従事者等に、がん対策の目的や意義、がん患者やその家族が利用できる制度や関係機関との連携体制、自施設で提供している診療・患者支援の体制について学ぶ機会」といった場面において、ロジックモデルによる拠点病院の評価の必要性や、医療者調査の意味合いなどについても学ぶと言った取り組みが必要ではないかと考える。

D. 考察

医療者調査やロジックモデルに各機関に取り組んでもらう上で、その意義に関する教育等を各拠点病院が実施出来る資材の準備や、その最初の受け皿となるがん拠点病院の事務部門が組織に対して働きかける際の手順書や資材の提供や言った視点が必要ではないかと考える。

E. 結論

本研究が実行力のあるものになっていく上で、拠点病院側の受け入れやすさについて引き続き検討を行なっていく。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他